入選

優しさ

栃木県　千塚小学校
6年　安井万結

私には、9歳はなれた双子の兄がいます。上の兄は自閉症で、にぎやかなところがとても苦手です。下の兄は体にまひがあり、車いすで生活しています。

ある日、母が栃木市のマスコットキャラクター「とち介」に会いに行こうと、私と兄たちをイベントにさそってくれました。私や兄たちはとち介に会いたかったので、行くことにしました。しかし私は、楽しみと同時にイベントでの人混みや会場での車いす移動に、少し心配も感じていました。

イベント会場に着くと、さっそく私の不安が的中しました。駐車場が砂利だったため、車いすで移動することができませんでした。そこで、母は係の人に事情を説明しました。すると、なんとその係の人は、イベント会場に一番近いコンビニエンスストアに駐車場を借りに行ってくれました。

そして、コンビニの人も快く駐車場を貸してくださったおかげで、イベントに参加できるようになりました。私たちは係の人やコンビニの人にお礼を言い、イベント会場に向かいました。

会場に着くと、たくさんの人でにぎわっていました。兄たちはその状況に、少しずつ落ち着きがなくなっていきました。すると、それを見ていた知らない人が、「こっちの方が静かだよ。」と、イベントスペースのテントの後ろに連れて行ってくれました。おかげで兄たちも落ち着きを取り戻し、私たちはとち介のいる広場の方に向かうことができました。

しかし、とち介がいる場所に行ってみると、今度はそこに階段がありました。すると、困っている私たちのところへ知らないお兄さんが二人来て、兄の車いすを持ち上げて、下まで運んでくれました。さらに、

「そこのテントにいるので、帰るときは声を掛けてくださいね。」

とまで言ってくれました。おかげで、私も兄たちもとち介と写真を撮ったり、餅つきに参加したりすることができました。そして、帰るときもお兄さんたちが車いすを上まで運んでくれました。そのおかげで、楽しくイベントに参加することができました。

今になって思うと、たくさんの人たちの優しさのおかげで、私や兄たちはとても楽しい思い出をつくることができました。困っている人たちを見て、すぐに気づいて声を掛けてくれた人たちのおかげです。みんな、とても優しい人たちばかりでした。心から感謝しています。私もそんな人になりたいと思います。

また、今回もそうでしたが、母は誰かに助けてもらうとき、いつも申し訳なさそうに「すみません。ありがとうございました。」と必ず言っています。私は、助けてもらったのに、謝るのは少し変だと感じています。いつの日か「すみません」がなくなり、「ありがとう」だけになる日が来るといいなと思います。

日常の中で、親切が特別なことではなく、当たり前の世の中にしていくため、まずは私にできる親切を実践していきたいです。